

## **テレビ会議による交流型フランス語授業の試み： 行動中心主義にもとづく協同学習の実践として**

### **Essai de cours de français par visioconférence : un travail coopératif basé sur la perspective actionnelle**

小松 祐子

**KOMATSU Sachiko**

筑波大学 **Université de Tsukuba**

**komatsu.sachiko.gt@u.tsukuba.ac.jp**

高橋 希実

**TAKAHASHI Nozomi**

フランス東洋言語文化学院 **INALCO**

**takahashi.nozomi@club-internet.fr**

本稿では、筑波大学と韓国ソウル大学のフランス語クラスをテレビ会議システムで結び行った交流型のフランス語授業について報告を行う。この授業は、第二外国語として学ぶフランス語を使って、他国の学習者と交流することにより、日ごろのフランス語学習に刺激や達成感を与え、学習モチベーションを高めることを主な狙いとしている。この種の授業については 2000 年以降さまざまな報告例が見られるが、今回の試みでは、とくに欧州言語共通参照枠（CECR）の提唱する行動中心主義の言語学習という観点から検討を行う。今日、大学の一般的な設備としてテレビ会議システムの普及が進み、システム自体の技術的性能も驚くほど進歩している。これらの設備の活用が期待されていることから、技術スタッフによる手厚い支援を受けることができる場合も少なくない。教師は教育学習内容に集中し、気軽にまた効率よくフランス語の授業に使えるようになってきた。以下では、大がかりなプロジェクトの一環としてではない、個人的取組みによるテレビ会議授業の例を示すことにより、この種の授業実践を検討する他の教員への参考となるような情報の提供を目指す。

#### 1. テレビ会議を用いた外国語授業

テレビ会議を外国語授業に用いる試みは2000年ごろから報告されており、フランス語教育に関しては、上智大学フランス語学科<sup>1</sup>、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス<sup>2</sup>、早稲田大学（立花教授）などの実践例が知られている。英語教育、日本語教

<sup>1</sup> Tanaka, S., Harada, S., Himeta, M., Muroi, K., Tokiwa, R. et Mogi, R. (2004), « Le Projet FR2003, programme d'enseignement de français : utilisation d'un système de visioconférence et activités à distance », 上智大学外国語学部紀要. 38, 55-83.

<sup>2</sup> 國枝孝弘、倉館健一、古石篤子「テレビ会議を利用した交流型授業における言語使用の考察」, 『フランス語教育』第33号, 2005, pp.136-145. 古石篤子・國枝孝弘・倉館健一「遠隔授業：テレビ会議利用の第一歩」, *Bulletins RENCONTRES* no.18, 2004, pp.20-24.

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

育に関する報告例はさらに多数に上る。これらの多くは、日本人の外国語学習者と学習言語母語者（日本語学習者または言語教授法専攻者など）との間のテレビ会議の事例であるが、日本人と他国の同じ外国語学習者との間の交流や、日本国内で日本人学生と留学生との間の交流に用いた例（立命館大学）などもある。多様な組み合わせが可能であることがわかる。

この種の授業の利点としては、ふだん学習言語を使用してコミュニケーションを行う機会の少ない学生に、リアルタイムで本物のコミュニケーションを経験する機会を与えるとということが挙げられる。コミュニケーション力を育成するとともに、教科書と教室空間だけでは経験できない貴重な文化的体験を通じて、他文化への開かれた姿勢を学び、異文化・自文化の理解を深めることも可能となる。他者と外国語で対話する喜びと難しさを知り、さまざまなアクセントの言語を生々の声を通して聞くことで、知的好奇心を刺激されるといった利点も考えられる。さらに、このような学習活動が外国語学習への動機づけにつながるということが指摘される。

一方で、テレビ会議による授業を導入するにあたってのデメリットとして挙げられるのが、何よりも交流先の確保とスケジュールや授業内容についての調整である。カリキュラム上の制約の多い授業の一環としてこの種の授業を実現させることには、相当の準備と調整が必要となる。以前に比べて技術的な問題は減じているとはいえ、最新の設備と技術サポートを要し、気軽に行える活動ではない。またテレビ会議授業の教育上の効果を引き出すには、教授法、評価方法などについて入念な検討が必要である。

### 2. ペダゴジーの観点から：行動中心主義の外国語学習

行動中心主義の外国語学習 (perspective actionnelle) は、欧州言語共通参照枠 (CECRL) によって提唱され、欧州の外国語教育分野で現在急速に普及しつつある考え方である。その基本理念は、CECRLの第二章に以下のように示されている。

« La perspective privilégiée ici est, très généralement aussi, de type actionnel en ce qu'elle considère avant tout l'utilisateur et l'apprenant d'une langue comme des acteurs sociaux ayant à accomplir des tâches (...) »

「言語の学習者を、タスクを遂行する社会的行為者とみなす」というこの考え方は、従来のコミュニカティブ・アプローチの延長線上にあり、タスクを中心とした言語学習の基盤となるものである。このためこのような言語観にもとづく教授法を *approche communic'actionnelle* と呼ぶことを提案する者もある<sup>3</sup>。社会的に行われるあらゆる言語活動は「タスク」であると考えられるが、とくに行動中心主義の言語学習活動としてはプロジェクト型の協同学習の形態が推奨されている。

このような行動中心主義の外国語学習は、日本でのフランス語学習というコンテキストの中でも重要な意味を持つ。なぜなら、日本のフランス語教育においては、フランス語を実際に使うことを想定しない教養主義の学習・教育観が根強く、*approche communic'actionnelle* の対極にあるとも言えるような教授法や教育内容がしばしば実践されているためである。このような教育を一概に否定するものではないが、問題も指摘できる。学習者は、フランス語が「使うためのもの」「使えるも

<sup>3</sup> Bourguignon, C. (2010) *Pour Enseigner les Langues avec le CECRL*, Paris, Delagrave.

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

の」であるという意識を持ちにくく、このことが学習意欲へ影響を与えているのではないか。また、「フランス語を学習するための学習」では、細部にこだわり達成感を得ることが難しい。言語学習においてはむしろ、「まず使ってみる」、「使おうとする」ことから得られる学習者自身の「気づき」が重要な意味を持つのではないだろうか。この気づきによって、学習者は主体的に自らの学習を組み立てることができるのではないか。

したがって、フランス語を用いてタスクを遂行し、達成するという機会を学習者に与えることは、きわめて重要であると思われる。学習者の学習観をかえることも教師の果たすべき役割の一つであり、「使う」ことを前提としたフランス語学習への転換を促すことは大切である。

タスクを中心としたプロジェクト学習においては、タスク遂行の過程そのものに学習があり、学習者はタスク完遂時に達成感が得られる。また学習者の主体的参加とモチベーションの向上が期待される。ただし、このような学習においては、タスクの明確化や事前事後を含めた総合的アプローチが重要となる。

これらを踏まえ、今回のテレビ会議による授業を、タスクに基づくプロジェクト型学習の機会として実践することとした。

### 3. 筑波大学における授業例

#### 3.1. クラス概要・技術的環境

今回テレビ会議授業を行った筑波大学のクラスは、比較文化学類2年生（フランス語学習歴1年半）の必修授業「専門第二外国語」のクラスである。受講生は10名、うち留学生1名、他学類学生1名であった。この授業は、専門領域でいかせるフランス語力の習得を目的とし、週2コマが設けられている。2コマの授業のうち、通常は1コマを日本人教員が担当し、講読を中心にした授業を行い、もう1コマではネイティブ教員がオーラル活動を中心とした授業を行っている。が、2011年度の特殊事情として、ネイティブの担当教員が年度途中で事情により転出し（フランスへ帰国）、後任のネイティブ教員の手配が難しく、日本人教員が担当しオーラルプレゼンテーションなどを扱うこととなった。こうして担当する授業内で、テレビ会議による交流型授業を行うこととした。

交流相手のクラスは、ソウル大学教育学部のPierre Martinez氏が担当する3・4年生ゼミのクラスで、受講者はフランス語教育を専攻する学生を主とし、フランス語のレベルは筑波クラスより上級であった。レベルは異なるものの、同じアジア地域でフランス語を学習する者同士の交流という意義が認められるだろう。

筑波大学では、学内の学術情報メディアセンター会議室を使用した。この会議室には、テレビ会議システムPOLYCOM HDX8002（2画面）とプロジェクタ設備が整っており、技術専門スタッフの支援が得られたため、教員は機器に一切触れることなく授業を行うことができた。実際の授業の1週間前に、ソウル大学との事前の接続テストを1回実施した（教員のみ参加、学生の立会いはなし）。接続クオリティはきわめて高く（音声の遅延や画像のぶれはほとんどない）、テレビ会議上のやり取りにストレスは感じられなかった。

#### 3.2. 授業活動

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

授業では、テレビ会議による1回の交流を設定し、その前後に準備とフォローアップの時間を設け、「準備、実施、振り返り」という3ステップによるプロジェクト学習（グループでの協同学習）を行った。ソウル大学との事前の調整の結果、テレビ会議授業は12月13日に行うこと、内容としては学生の個別の自己紹介とグループによるプレゼンテーションを中心として扱うことが決まった。これを受け、以下のよう作業を進めた。

### A) 準備段階：

11月後半（筑波大学は3学期制のため、11月後半に2学期末試験が行われる）、プリント配布により企画の告知を行い、秋休み中（11月最終週）に自己紹介を考えてくることを課題とした。12月の本番前の週の授業では、大学紹介のプレゼンテーションをグループワークにより準備した。3-4名からなる各グループの作業には、大学院生TAと留学生TA（チュニジア人フランス語話者）および教師が巡回し、指導を行った。授業内に準備した発表内容にしたがい、本番までにパワーポイントを完成し、教師へメール添付にて送付し添削を受けることを指示した。

### B) テレビ会議当日：

テレビ会議当日の授業前半にはリハーサルを行い、発音指導などの最終調整を行った。45分間のテレビ会議接続中には、以下の活動を行った。1.学生の自己紹介（筑波大学、ソウル大学）、2.学生グループによる大学紹介などのプレゼンテーション（筑波大学、ソウル大学）、3.質疑応答。接続終了後に学生にアンケートを記入してもらった。

### C) 事後のフォローアップ（翌週の授業）：

反省会を行い、今後の抱負を述べてもらった。ソウル側の発表原稿をわたし、パワーポイント資料やビデオを視聴しつつ、復習を行った。

## 3.3. アンケートの結果

アンケートでは、まず学生のフランス語学習動機を問う設問を設けたが、全員が「教養のため」と回答した。このことはまさに行動中心主義の学習を実践することの意義を肯定するものと考えられる。これまでフランス語学習を教養としてのみとらえていた学生の意識に、新たな展望を開くことができるかもしれないためである。

韓国のフランス語学習者とのテレビ会議については、「同じフランス語を学習している他の国の学生との交流ができて親近感があった」、「フランス語という言葉を通じて韓国の人たちと交流ができたのがよかった」、「韓国のフランス語教育のレベルの高さを垣間みて、こちらの勉強の刺激になった」といった意見が寄せられた。学生たちがフランス語を学ぶ他国の学生との交流を好意的に受け止めていることがわかる。

テレビ会議システムの導入については、「双方向的なところがよかった」、「お互いの顔が見られたのがよかった」、「リアクションがあつて嬉しかった」、「楽しかった」、「いい機会だった」など、高い評価を受けた。

この授業が彼らのフランス語学習意識へ刺激を与えたことがわかる感想も多数寄せられた。「質問に答えるのが難しい」、「何を言っているかよくわからなかったのもっと聞けるようになりたい」と、自己の学習への反省が見られるとともに、「リスニングだけでももっと向上させたい」、「もっとフランス語を勉強しようと思

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

いました」、「もっと相互交流ができればいいと思いました」、「会話授業がなくなってしまったので、聞き取りを授業でやりたい」など、今後の学習動機につながったことがわかる。

テレビ会議授業のための準備や実施上の問題点を指摘する声もあった。「プレゼン以外に少し時間を使いすぎた」、「発表前にもっと読む練習などする時間が授業でとれたらよかった」などである。今回の試みでは、カレンダー上の制約のため、本番前の準備に十分な時間がとれなかったことが残念ではあったが、学生は少ない準備時間のなかで驚くべき集中力を見せてグループ作業を行い、プレゼンテーションというタスクを完遂した。このことが彼らに自信を与える経験となったことは確かである。

#### 4. まとめ：テレビ会議授業の意義と課題

上記アンケート結果からわかるように、今回のテレビ会議授業の成果としては、学んだフランス語を使用するという実感を学生に与え、学習の意識化に役立ったことが挙げられるだろう。フランス語による交流を経験して、学習者は自らの学習を振り返り、学習の不足部分を反省し、今後の目標設定を行った。フランス語を実際に使ってみたことが、フランス語学習の目標を明確化することにつながり、学生の学習意欲を高める結果となったと言えよう。わずか一度のテレビ会議授業がきわめて強い印象を学生に与えたことがわかる。また教師にとってもその後の授業計画の推敲に役立つ結果となった。授業内にこのような実践の場を設けることは、きわめて有意義であると考えられる。

今回の試みにより、テレビ会議が技術的なストレスなく外国語の授業に使用できる身近なツールとなっていることが実感された。しかし、テレビ会議というシステムはあくまでも装置にすぎず、いかに授業を組み立てるかは教師次第である。十分な授業の効果を得るためには、しっかりとした教授法に基づいた授業計画が重要となる。本番のみならず、準備やフォローアップの作業において、いかに学生の能力を引き出すか、教師の指導法には工夫が必要である。

この種の授業を行うにあたっての一番の課題は、クラスの条件にあった交流相手を確認することであると思われる。相手探しは教師の個人的人脈に頼る場合が多く、容易ではない。しかし、すでに電子メールの交換を目的としたクラス・パートナー探しのためのWebサイトは存在しており<sup>4</sup>、これらを活用してまずはメール交換から交流をはじめめることも検討できるだろう。ただし日本と同程度にテレビ会議システムが普及している国は限られており、この種の授業の実行可能性は、今後の同システムの普及にかかっていると言えるだろう。日本国内のクラスを結ぶ授業も検討する価値があるだろう。テレビ会議を用いた授業について、今後さらにさまざまな実践例が蓄積されていくことにより、フランス語教育の活性化に寄与することが期待される。

---

<sup>4</sup>フランコフォニー国際機関 (OIF) のサイト(<http://francparler-oif.org/>)には Petites annonces のコーナーからフランス語でのクラス間交流 (correspondances) を希望する教員による投稿が閲覧できる。また E-pals Global Community (<http://www.epals.com>)は英語のサイトであるが、世界中の交流希望クラスが登録されており、言語による検索をかけることができる。